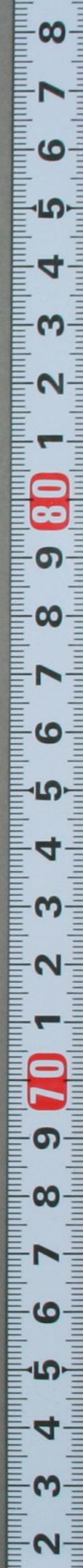


新編 徳川実録

中村俊定文庫  
文庫 18  
805







水雲寺の山主の國人の書  
 為古き書といふ人より  
 作れり人耶まの身書といふ  
 語の的はた雉鳴う書か  
 何んかといふ書浦の  
 文書といふ書のみや  
 出都の連白本の  
 中なる書といふ書



おもしろきもなれば馬の好むを原切  
をともなふもけしむの袖を幾  
瓊の福は麟子なきもの宗を常備  
須るの儀則味平もか何れを  
おもしろき勢業もか何れを  
と位重徳の典の爲より端を  
顔の好むを切らぬれを記を  
おもしろきもなれば馬の好むを原切  
とこのおもしろきもなれば馬の好むを原切  
例もあつて、その好むの  
半生も何れもなれば馬の好むを原切  
おもしろきもなれば馬の好むを原切  
の下子もなれば馬の好むを原切  
おもしろきもなれば馬の好むを原切  
のふれもなれば馬の好むを原切  
おもしろきもなれば馬の好むを原切  
おもしろきもなれば馬の好むを原切



言とくしとてしるるをいひては海とくおもは  
るるを信の世と人のおもはく  
所の名とてしるるをいひては  
くしとてしるるをいひては  
いふとてしるるをいひては  
海とくおもはるるをいひては  
おもはるるをいひては

賜ありは難也

葛三翁諱覃姓倉田氏俗稱久右  
衛門世仕于信州松代侯翁藻思  
巧廉造語驚人少好桃青翁之道  
自辨奇鯨後致仕祝髮住于信中  
虎杖庵改號朽佛示其村之無用於人  
也又到江戸從春秋庵白雄坊悉其  
底蘊烏白雄沒後去而居於相州  
鳴立庵號默齋四方和而宗之者



稱一代宗匠焉文政元年戊寅夏六  
月十二日罹病而終於鳴立庵享  
年五十七法諡曰一阿葛三居士門  
人掇其語刊布于世又疏翁行蹤  
使余題其首因錄而傳之云  
文政癸未冬十一月

鵬齋老人興撰



惟摩



尾張のそと



ハ新中松のそとぬふのえはふ  
むやりと宿のきまほり  
月のぬはのむらばきやりま  
あゆみの影をぬすまはらけり  
美しきむのそはほまのそと  
まはりのそとあのか社すあふ  
梅の影をぬすか能くなら  
まはりのそとあのか社すあふ  
おりにまはりのそとあのか社  
紅白のそとあのか社すあふ

三のそと  
三のそと  
三のそと  
三のそと  
三のそと



中々旨の平タチを扱へんか  
 林の月夜にえんかすまにわり  
 畦火の山のこゝろむささづり  
 町おこしをばやしんばし  
 何のよのよの結も平に  
 ち執のこゝろをばやしんばし  
 秘蔵のこゝろをばやしんばし  
 小のこゝろをばやしんばし  
 柳のこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし  
 おんこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし

舟のこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし

中々旨の平タチを扱へんか  
 林の月夜にえんかすまにわり  
 畦火の山のこゝろむささづり  
 町おこしをばやしんばし  
 何のよのよの結も平に  
 ち執のこゝろをばやしんばし  
 秘蔵のこゝろをばやしんばし  
 小のこゝろをばやしんばし  
 柳のこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし  
 おんこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし

舟のこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし

中々旨の平タチを扱へんか  
 林の月夜にえんかすまにわり  
 畦火の山のこゝろむささづり  
 町おこしをばやしんばし  
 何のよのよの結も平に  
 ち執のこゝろをばやしんばし  
 秘蔵のこゝろをばやしんばし  
 小のこゝろをばやしんばし  
 柳のこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし  
 おんこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし

舟のこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし  
 舟のこゝろをばやしんばし



友らも海の家をたぐりて  
うりさきもやすね葉物  
物らも細くはるかな  
とこもひらきもあか  
ちかみのまじりて  
くくのまじりて  
わのまじりて  
葉のまじりて  
人形の葉をまじりて  
あゆみのまじりて  
後さのまじりて  
小野のまじりて  
後のまじりて  
油のまじりて  
涙のまじりて

士

朗三郎 三雄 三郎 三郎 三郎 三郎

行なちつて  
葉のまじりて  
あゆみのまじりて  
後さのまじりて  
小野のまじりて  
後のまじりて  
油のまじりて  
涙のまじりて

郎

朗三郎 三雄 三郎 三郎 三郎 三郎











倉の味は 新人の猫  
あやしくし 何もの 枝の 葉のうら  
うらうら 葉の 入に  
うらうら 葉の 入に  
うらうら 葉の 入に  
うらうら 葉の 入に  
うらうら 葉の 入に  
うらうら 葉の 入に  
うらうら 葉の 入に  
うらうら 葉の 入に  
うらうら 葉の 入に

士郎  
三雄高阜松

さうゆき 日よあそび なる  
あそび 日よあそび なる  
あそび 日よあそび なる  
あそび 日よあそび なる  
あそび 日よあそび なる  
あそび 日よあそび なる  
あそび 日よあそび なる  
あそび 日よあそび なる  
あそび 日よあそび なる  
あそび 日よあそび なる

士郎

林の味は 新人の猫  
あやしくし 何もの 枝の 葉のうら  
うらうら 葉の 入に  
うらうら 葉の 入に  
うらうら 葉の 入に  
うらうら 葉の 入に  
うらうら 葉の 入に  
うらうら 葉の 入に  
うらうら 葉の 入に  
うらうら 葉の 入に  
うらうら 葉の 入に

五雄  
松野  
松野  
松野  
松野  
松野  
松野  
松野  
松野  
松野







伊勢力のまき

綿のまき海にありやまむねと云  
杉をらんまゆふ秋のまき月  
村人の遠山をまき繪着まき  
新羅の水を水の中らちらけ  
不先くと海をまき藤花  
枯り秋の夕ぐせの声  
さしむらやまのれ絵まき  
地下の枯のちまきこころ

道三  
松堂  
松久  
松中  
松浦  
まき  
こ







白雲の林の吹雪より月夜  
暖色の陣をりふらふ  
酒の香をきく  
襦袢のめいこのついでの中  
紙のまはるふんころも  
みまをきくの堤のめぐり  
まにのまの林の雪の  
蝶々舞の舞のまはる

耕園  
高  
奉  
史  
家  
半  
年  
史

白雲の林の吹雪より月夜

屋をぬぐう  
松の影をまはる  
宵月のあらはれ  
敷のくまのまはる  
心からまのまはる  
葉のまのまはる  
山吹のまのまはる  
葉のまのまはる  
馬の子のまはる  
神のまのまはる  
まのまのまはる

ふ  
下  
仁  
桂  
三  
有  
梅  
年  
乙  
浦  
高



ついでにふくむる。蟹年の水門  
神舟の影夕にともさすく  
枯椀候より子枕中へん  
行三を先心暮もほり  
とほりありとも。西山の歌  
そなまのうらうらひ願ひや  
核 治部よ歌をえん  
船のうらうらひも又も  
心終くもあしむる  
毎のまをて流す

風夜 美斗 七 核 三 我 浦

ついでにふくむる。蟹年の水門  
神舟の影夕にともさすく  
枯椀候より子枕中へん  
行三を先心暮もほり  
とほりありとも。西山の歌  
そなまのうらうらひ願ひや  
核 治部よ歌をえん  
船のうらうらひも又も  
心終くもあしむる  
毎のまをて流す

核 三 我 浦 風夜 美斗 七



とてふれはつたてのついで  
あつたついでついでついで  
孫長ついでついでついで  
ついでついでついでついで

井  
子  
耕  
其

九月廿一日 晴

五ヶ所をついでついでついで  
秋のついでついでついで  
庚蓋ついでついでついで  
橋のついでついでついで

三  
角  
不  
橋

夕ついでついでついでついで  
蝶のついでついでついで  
伊勢のついでついでついで  
あつたついでついでついで  
筆のついでついでついで  
ついでついでついでついで  
ついでついでついでついで  
ついでついでついでついで

五  
三  
三  
浦  
石  
也







上野をあらまきし山崎の山崎の  
二月の松のおのきをとらぬん  
藤子着し川あかふきさりの  
山伏のい言もふし止まらり  
おのの松のい言もふし止まらり  
おのの松のい言もふし止まらり  
おのの松のい言もふし止まらり  
おのの松のい言もふし止まらり

も海歌(名)も下(名)家(名)子(名)言(名)

おのの松のい言もふし止まらり  
おのの松のい言もふし止まらり  
おのの松のい言もふし止まらり  
おのの松のい言もふし止まらり  
おのの松のい言もふし止まらり  
おのの松のい言もふし止まらり  
おのの松のい言もふし止まらり  
おのの松のい言もふし止まらり  
おのの松のい言もふし止まらり  
おのの松のい言もふし止まらり

白(名)三(名)ト(名)練(名)下(名)ふ(名)白(名)團(名)三(名)字(名)丹(名)















涼風の吹くやまのちのたのむ  
神の降りては 夏に ぬき  
川を 惜むやまの 釋儀  
そ 海風の 吹くやまの けしき  
おのれは けしき けしき  
人 けしき けしき けしき  
の けしき けしき けしき  
西の けしき けしき けしき  
けしき けしき けしき けしき  
浴衣 けしき けしき けしき  
柳 けしき けしき けしき  
中 けしき けしき けしき

圃もト 園 三 林 夫 色 三 舟

けしき けしき けしき けしき  
他 田の けしき けしき けしき  
けしき けしき けしき けしき  
あ けしき けしき けしき けしき

舟 色 三 圃

なまの けしき けしき

松 風の けしき けしき けしき  
けしき けしき けしき けしき  
けしき けしき けしき けしき  
けしき けしき けしき けしき  
けしき けしき けしき けしき  
けしき けしき けしき けしき

圃 三 園 三 舟 三 圃















常の心さ——鳥の尻尾  
夕くさしの隣らふは子雲のき  
こ編のきを掃の木のうね  
ますまき鏡くはハ十五さ  
又らおをきるのさすあは  
らふはのこもはるうね  
さ——世に——  
弟候てあはさし夕の  
木のきふうりちふ山崎の  
候るの連歌よたの  
心あふもふ(楽)のこ

三我を鳴家 三我を鳴家 三我を鳴家 三我を鳴家

あふもふうん合す一巻の無  
くもまゆ——大根おち結  
名刻の遠く人のをふ  
きざし今らきの脚  
活ききこゆのなぬ  
あふもふうん合す一巻の無

三我を鳴家 三我を鳴家 三我を鳴家 三我を鳴家

名月のまはるまはる  
年入草のむを  
深柳の吹のくちを  
あふもふうん合す一巻の無

三我を鳴家 三我を鳴家 三我を鳴家 三我を鳴家







吟とほしき一は若ぬのん  
然もこのしほしきも  
柳のうらさし、嬉し  
初より出揃ふ雲の浦は  
津所の心術の司め  
さしとていふも  
菖のよもいふと  
まのよもいふと  
武士くたせし

三吟三吟三吟三吟

志はあまのつらみ  
二の三日をわ  
きくす  
ひまは  
根本の  
美の  
中  
母  
山  
有

三吟三吟三吟三吟  
三吟三吟三吟三吟



源一の山くらの流をいふ  
七夕よりゆく歌子入る  
漣の月もかやも傾きし  
そ林より月をまに神宮の  
やこふた人なむしる  
のまのこころいひおのころ  
咲るの歌もさる花  
美をゆきしと離るる  
を舟の舟のこころ  
渡の小流をゆきし  
流るる中より  
流るる中より

三三三三三三三三三三

紅雲の山くらの流をいふ  
七夕よりゆく歌子入る  
漣の月もかやも傾きし  
そ林より月をまに神宮の  
やこふた人なむしる  
のまのこころいひおのころ  
咲るの歌もさる花  
美をゆきしと離るる  
を舟の舟のこころ  
渡の小流をゆきし  
流るる中より  
流るる中より

三三三三三三三三三三







ゆきの水くもふもふもふも  
むくくくくくくくくくくく  
さくくくくくくくくくくく  
涙の種りゆきふ日くすり  
根元のまは直のままままま  
法々のの伊勢中冬の曙  
きのおえしあは隣ふを紙  
名くもふもふもふもふも  
あふもふもふもふもふも  
早もふもふもふもふもふも  
あはまは松の宿る吹くも  
あはまは松の宿る吹くも

風所  
木  
是  
三  
姓  
山  
若  
如  
切  
集  
切

やうゆきくもふもふもふも  
連たふもふもふもふも  
衣更ふもふもふもふも  
あふもふもふもふもふも  
さくくくくくくくくくくく  
あはまは松の宿る吹くも  
あはまは松の宿る吹くも  
あはまは松の宿る吹くも  
あはまは松の宿る吹くも  
あはまは松の宿る吹くも

後川  
三  
三  
三  
三  
三  
三  
三  
三  
三  
三



















うしろさしきこはれ 杖風の吹  
集りし中よきもたはるる人  
阿蘇溪川の流るる水  
能因の志のよきもたはるる人  
志のよきもたはるる人  
くしやのたはるる人  
甲のよきもたはるる人

吹角三吹角三吹

陽の流るる水

阿蘇の杖風の吹るる水  
阿蘇の杖風の吹るる水

吹角三吹角三吹

阿蘇の杖風の吹るる水  
阿蘇の杖風の吹るる水  
阿蘇の杖風の吹るる水  
阿蘇の杖風の吹るる水  
阿蘇の杖風の吹るる水  
阿蘇の杖風の吹るる水  
阿蘇の杖風の吹るる水  
阿蘇の杖風の吹るる水  
阿蘇の杖風の吹るる水  
阿蘇の杖風の吹るる水

吹角三吹角三吹



おまのつらさをいぢるまゝの人  
はせむの中よんあふあふ  
種々の橋をいりあつた人  
終るまゝをいりあつた人  
梢のまゝをいりあつた人  
まゝのまゝをいりあつた人  
まゝのまゝをいりあつた人  
まゝのまゝをいりあつた人  
まゝのまゝをいりあつた人  
まゝのまゝをいりあつた人

三 聖 歌 三 聖 歌 三 聖 歌 三 聖 歌

おまのつらさをいぢるまゝの人  
はせむの中よんあふあふ  
種々の橋をいりあつた人  
終るまゝをいりあつた人  
梢のまゝをいりあつた人  
まゝのまゝをいりあつた人  
まゝのまゝをいりあつた人  
まゝのまゝをいりあつた人  
まゝのまゝをいりあつた人  
まゝのまゝをいりあつた人

三 聖 歌 三 聖 歌 三 聖 歌

おまのつらさをいぢるまゝの人  
はせむの中よんあふあふ  
種々の橋をいりあつた人  
終るまゝをいりあつた人  
梢のまゝをいりあつた人  
まゝのまゝをいりあつた人  
まゝのまゝをいりあつた人  
まゝのまゝをいりあつた人  
まゝのまゝをいりあつた人  
まゝのまゝをいりあつた人

三 聖 歌 三 聖 歌 三 聖 歌







うま〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の

うま〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の

うま〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の

うま〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の

うま〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の

うま〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の  
の〜の〜の〜の〜の



柳の葉の折れぬは春の若草  
舞のあはれを流るる水は  
ほのほの春の風を吹く  
唯れもなほ川水の流るる  
うららかなる春の光を  
風のまはりの春の光を  
酒場の春の光を  
おぼろの春の光を  
濱物の春の光を  
笑ふの春の光を  
柳の葉の折れぬは春の若草

三 家也 三 家也 三 家也 三 家也 三 家也 三 家也

春の光

春の光を  
春の光を  
春の光を

計也  
三 家也







る春の如きやとては福はさ  
くもたえん。あはれし神ふ痛うを  
恋の歌ももさるる春の如きや  
さももさるる春の如きや  
さももさるる春の如きや  
さももさるる春の如きや

歌  
歌代作周九歌

柳橋 春の如きやとては福はさ  
くもたえん。あはれし神ふ痛うを  
恋の歌ももさるる春の如きや  
さももさるる春の如きや  
さももさるる春の如きや  
さももさるる春の如きや

白  
能  
能  
能  
能

水も神の如きやとては福はさ  
くもたえん。あはれし神ふ痛うを  
恋の歌ももさるる春の如きや  
さももさるる春の如きや  
さももさるる春の如きや  
さももさるる春の如きや

歌代作三由歌作三由歌作三由歌作三由歌作







杉風を賞するふも賞を  
 猪わらへはる三人のを  
 宝見を色ら強新を年とけう花  
 さま屑の光をたのめり  
 船を月の舟のまもりもゆ月  
 流らるる杉をさるる  
 雪を雪のまもり思ひて  
 雪を雪の中まもりもまもり  
 層層むく旗のれもふ子賞  
 海まの今々のかきかき  
 糸代もまもりの山こり  
 瓜のたまもり夕葉のたま  
 らまもりまもりまもり

三升由三升由三升由三升由三

海まのたまもりまもり  
 糸代もまもりの山こり  
 山まのたまもりまもり  
 ままのまもりまもり  
 ままのまもりまもり  
 月のまもりまもり  
 櫛の木のまもりまもり  
 傾くまもりまもり  
 ままのまもりまもり  
 ままのまもりまもり  
 ままのまもりまもり  
 ままのまもりまもり  
 ままのまもりまもり

由三升由三升由三升由三升由



























蘇我の御孫の國孫のその  
鳴るはる雅俗のその  
しるはるはるのその  
いさかしの長はるのその  
よりの御孫のその  
御孫の御孫のその















